

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム
研究者派遣プログラム

成果報告書

提出日：平成28年10月27日

【基本情報】

○申請者

採択年度：平成27年度

部局名等：文学研究科（白眉センター）

職名：特定助教

氏名：武内康則

研究課題名：契丹文字の解読と契丹語の歴史言語学的研究

○渡航先

国名：アメリカ合衆国

研究機関名：インディアナ大学

研究室名等：〔研究室名〕中央ユーラシア学部

〔職名等・氏名〕ジョルジ・カラ教授

渡航期間：平成27年10月26日～平成28年9月30日（341日）

○渡航期間中の出張

出張先：

目的：

期間：

出張先：

目的：

期間：

出張先：

目的：

期間：

※ 渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。

※ 複数回に渡る場合は、適宜追加して下さい。

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム
研究者派遣プログラム

【成果】

○プロジェクトの成果及び今後の展開

・研究概要

報告者は、10-12世紀に東アジアで使用されていた契丹文字とそれによって表記された契丹語の解明を進めている。契丹文字・契丹語の解明を進めるために、契丹語と関連があると考えられているモンゴル語などのアルタイ諸語との比較を行いながら、解読に向けた作業を続けている。

契丹文字は、契丹大字と契丹小字の2種の文字体系が存在している。近年の研究により、契丹小字の解読は大きく進展したが、契丹大字については未解明の部分が多い。本プロジェクトでは、主に契丹小字と契丹大字の比較研究と、契丹文字表記の背後にある契丹語の文法に関する研究を進めた。結果として、契丹語の派生接辞の分析を研究論文として発表した。また、契丹大字による漢語音の表記の分析を行い研究論文として発表予定である。

・国際共同研究の立上げ・ネットワークの構築

※ 国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金、渡航先国で実施した実地調査や文献調査等の内容、参加した学会やその他の学術・交流組織、そこから構築／深化した研究ネットワークの内容等

受け入れ機関である米国インディアナ大学には、インディアナ大学にはアメリカモンゴル学会(The Mongolia Society)の本部があり、研究発表を行い研究者との交流を進めることができる機会としての国際学会やシンポジウムが開催されている。滞在中は、アメリカモンゴル学会のシンポジウム等へ参加し、研究者との交流し関係を深め、今後の研究連携等について意見交換を行った。

・国際共著論文の投稿・発表等の状況、国際学会等での発表状況【予定を含む】

※ 論文の題名・雑誌名・共著者名・投稿・刊行状況、学会名、発表題目等

報告者の渡航期間中に発表した研究論文は以下の通りである。

国際共著論文はないが、今後は今回の滞在中に交流した研究者との共同研究を計画している。

武内康則 編 (2015) 『豊田五郎契丹文字研究論集』京都：松香堂書店。

武内康則 (2016) 「契丹語の複数接尾辞について」『言語研究』149: 1-17.

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム
研究者派遣プログラム

・在外研究経験によって習得した能力等

※ 渡航先機関で得た研究の展開方法、研究室の運営方法、教育方針・人材育成方法等

週に一度、受け入れ研究者であるカラ教授とともに、契丹文字資料の購読会を開催した。モンゴル語史の観点からみた契丹語研究についての洞察を深めることができた。

また、カラ教授は、長年アルタイ諸語の文献研究の分野で指導的な研究を続けながら、契丹文字研究の分野でも重要な貢献をしてきた報告者の目指す研究者であり、カラ教授のもとで学ぶことによって、自分自身の研究姿勢と研究方法論について考え直すこととなる貴重な機会となった。

・在外研究経験を活かした今後の展開

報告者はこれまで、主に中国やモンゴル国などの出土資料の現地調査を進めてきたが、今回の滞在では多くの学術論文や書籍等の二次資料を収集することができ、今後の研究を進める上で重要な機会となった。今後は、今回の在外研究に得ることのできた研究の方法論・研究姿勢をもとにより広い視野から研究を進めていく予定である。また、今回の滞在を契機に国内外の研究者との共同研究などを積極的に進めていきたいと考えている。

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム
研究者派遣プログラム

英文成果報告書

○申請者情報

部 局 名 : The Hakubi Center for Advanced Research
職 名 : Assistant Professor
氏 名 : Yasunori Takeuchi
研究課題名 : Towards a Decipherment of the Khitan Language and Scripts
渡航期間 : Oct. 26, 2015 - Sep. 30, 2016

○渡航先情報

国 名 : U. S. A.
研究機関名 : Indiana University
研究室名等 : Department of Central Eurasian Studies
受入研究者名 : Professor György Kara

○渡航報告

※ 渡航先の研究環境、研究者との交流、研究発表の状況等、渡航中の滞在経験について英語で2~3ページ程度で記述して下さい。受入研究者と撮影した写真や研究発表で用いた図等について、可能な範囲で別添として提出して下さい。

Project Description

The Khitan language is generally recognized as an undeciphered language, of which sources are written in the Khitan scripts or phonetically annotated in Chinese characters in Chinese documents. They are regarded as very important sources in the research of the Liao Dynasty (907-1125) history and Mongolic Linguistics.

My overall research objective has been to reconstruct the Khitan Language from the perspective of historical linguistics. During the stay in Indiana University (2015/10/26 – 2016/9/30), I conducted my research on the derivational suffixes of the Khitan language in order to describe the grammar and lexicon of the Khitan language through an analysis of the materials written in the Khitan scripts.

Achievements

I have conducted research on the derivational suffixes in Khitan, mainly with regard to the plural suffixes. The purpose of the research is to identify the conditions under which plural suffixes are used in nouns in the Khitan language. According to our investigation, the distribution of such plural suffixes as -*ner*, -*d*, -*s*, -*dʒ*, -*ŋ*, and -*l* is closely related to the meaning of the words to which they are attached. This relationship can be captured by an animacy hierarchy. Specifically, -*ner* is used with personal pronouns and kinship terms of high animacy, and -*d* is used with both animate and inanimate nouns of lower animacy, while -*s* and -*ŋ* are used with highly abstract inanimate nouns

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム
研究者派遣プログラム

and adjectives of even lower animacy. I also demonstrate a possible connection between the selection of these suffixes and parts of speech/noun classes in the Khitan language.

References:

武内康則 (2016) 「契丹語の複数接尾辞について」 『言語研究』 149: 1-17.

Plan for future research

Research on the Khitan numerals and a comparative study between Khitan Small Script and Khitan Large Script are in progress. The end product from this research would be articles in such scholarly journals as *Acta Orientalia Hungaricae* and *Journal of Asian and African Studies*. In addition, I am currently working on a book entitled “契丹語の研究 (A Study of the Khitan Language)”, which is expected to be published next year. The project is funded by Kyoto University.